



南薩畑かん事業

九州最大のカルデラ湖「池田湖」を
巨大な調整池とする
壮大な畑地かんがい事業が
厳しい条件の土地を
肥沃な農業地帯へ変えた。

今から約40年前。現在は豊かな農業地帯として知られる南薩地域一帯は、シラスやコラなどの保水力に乏しい火山性土壌に覆われ、しばしば干ばつに悩まされていました。そのような土壌環境では、作物もサツマイモやナタネなどの干ばつに強いもののしか育たないうえに、その収益性は低く、南薩地域の農家の生活は、過酷な水くみと細々とした農業を続ける厳しいものでした。

しかし、昭和45年。作物栽培に必要不可欠な水を雨水に頼らざるを得ず、長年にわたり苦しい生活を強いられていた南薩地域に転機が訪れました。総受益面積6000ヘクタール以上に及ぶ大規模な畑地かんがい事業（畑かん事業）がスタートしたのです。

それは、九州最大のカルデラ湖である池田湖を調整池として活用し、周辺の農地を潤すという壮大な計画でした。しかしながら、雨水の流れ込む範囲が狭い池田湖だけでは、必要な水量をまかない



©K.P.V.B

①⑤今では見渡す限りの豊かな農地が広がる。②池田湖からの水を引くことで周辺の畑を潤した。
③畑かん事業開始前の農業の様子。(サツマイモの収穫) ④畑かん事業一帯。

（きれなかったため、^{えい}額姪町（現南九州市）を流れる馬渡川、高取川、集川の3河川の余剰水に着目し、最大口径2・4メートルもあるトンネルで池田湖に流し込む計画が実施されました。

いったん湖に貯えられた水を、ポンプを利用して、湖面より標高約90メートルほどの高台に設置したいくつかの巨大な貯水タンク（貯水量10万立方メートル）までくみ上げ、その後、標高差を利用して低地に広がる畑地まで送水パイプで配水する仕組み。地域内を縦横に走るパイプラインの総延長は、約1300キロ余りにも達し、これは鹿児島から静岡までの距離に匹敵する長さでした。

この畑かん事業は、昭和45年に国営かんがい事業が開始されたのに続き、47年に県営の南薩畑地かんがい事業が着工され、およそ25年の歳月をかけて、国営事業が昭和59年に、県営事業は平成6年に完了しました。

その結果、南薩地域一帯は、畑かん事業以前の苦しい農業とは違って変わった、収益性の高い、新しい農業経営が可能となりました。水の乏しかった台地に、大区画の畑が生まれ、茶やニンジン、カボチャ、ソラマメなど収益性の高い作物が栽培されるようになりました。また、オクラや花きなどのハウス栽培も始まり、南薩地域の生産農業所得は飛躍的に向上しました。農業の発展は、地域の食品加工業や流通業、商業にも波及効果をもたらし、この畑かん事業により、南薩地域の農業や暮らし、地域経済は、めざましい発展を遂げたのです。

● 南薩畑地かんがい実施概要図

概要

南薩畑かん事業
 国営および県営南薩畑地かんがい事業
 実施時期：国営：昭和45年～昭和59年
 県営：昭和47年～平成6年
 対象地域：2市4町（指宿市・枕崎市・山川町・開聞町・額姪町・知覧町）
 ※ 現在の指宿市、枕崎市、南九州市
 総受益面積：6,072ヘクタール

